

特集

コンタクトレンズ：研修医のための一般診療でのポイント

序 論

雑賀司珠也*

今月号では、コンタクトレンズを特集として取り上げました。RGP ハードコンタクトレンズ、各種ソフトコンタクトレンズが選択肢となっているなかで、それぞれの長所・短所の知識やフィッティング技術は日常の外来診療で欠かせないものと思います。角膜上皮障害、巨大乳頭やドライアイとの関係がある症状も日々、遭遇します。矯正より治療的な側面の強い治療用コンタクトレンズの使い方、円錐角膜でのコンタクトレンズ処方とクロスリンク治療の適応やその場合のコンタクトレンズ処方のハウツーも、専門医に紹介する際に患者に対してアウトラインを説明したほうがよいように感じています。さらに小児の近視の進行に関して、ご両親があらかじめネットで情報をお持ちの場合も多いかと思います。低濃度アトロピンと多焦点ソフトコンタクトレンズの処方について、外来診療の現場で突っ込んだ質問を受けることも想定できます。今回、取り上げなかったのですが、巷で使用されているカラーコンタクトレンズも、色素がどこに入っているかなど、その

品質にばらつきがあるようです。

私が医師免許をいただいた昭和 63 年では、「近視の矯正に PMMA ハードコンタクトレンズと各種ソフトコンタクトレンズのどちらを選びますか？ それとも眼鏡にしますか？」程度の診療でした。ソフトコンタクトレンズのガス透過性の程度ですら、最新のトピックでした。医学・医療の進歩は診断学や薬剤、手術機器と手術手技などと同様、コンタクトレンズ診療においても目覚ましく、年単位で様相が変わっていています。日々、コンタクトレンズに携わっておられる先生には復習のような内容も多いかと存じますが、私の職場(和歌山県立医科大学)では、商品の取り扱いとコンタクトレンズに対する支払いに関する観点から、コンタクトレンズ診療は関連個人病院に委ねるという体制を取っていますので、知識がアップデートできていないかもしれません。今回の特集をきっちりと読み込んで、時代に取り残されないようにしたいと思います。

*Shizuya Saika 和歌山県立医科大学眼科学講座